

特 240

936

昭和十一年四月十七日 (二百五十回忌紀念)

福嚴開山鐵文禪師

福嚴禪寺



始



特240
936



福嚴開山
鐵文禪師



鐵文禪師像



はしがき

開山鐵文禪師二百五十年の遠忌に際し師の芳躅を偲ばんがために一小冊子を出すことにした。禪師には語録があり詩偈があり、傳ふべきもの少くはないが、いづれも禪の真諦に觸れてゐるので一般に味解し難い處が多い。そこで極めて通俗的に簡略な行狀の片影を叙することにした。なほ此度遠忌供養を營むに就て開基立花家は勿論舊柳河領内の町村長區長檀徒各位の甚大なる御同情と御援助に就いては感激措く能はざるものがある。茲處に謹んで謝意を表する。

昭和十一年四月

福 嚴 禪 寺

開山鐵文和尚者海津村產而西原某子也。始出家師天叟寺俊嶺和尚。後聞唐僧隱元和尚渡海長崎往干彼地爲法弟。其後又爲木菴和尚弟子嗣法。寬永巳酉年、因好雪公命、給當寺安置君公代々靈牌。寺領三百石。

(南筑明覽)

福嚴寺開山鐵文禪師

目次

一、緒言	二
二、出生と幼時	三
三、師と隱元、木菴	六
四、藩主の招聘	三
五、語録の獻納	六
六、法雲寺と十八羅漢	六
七、晩年と往生	六

略年譜

題徑山費隱老和尚靈蹟尾

氣爽風清。徧水涯。古帆高掛倚天開。此時靈憶祖。

翁語。恰值中秋待月來。

留別黃檗諸昆仲

自願行藏似太唐。如何熱處又難忘。雖然飛錫紫

陽去。靈憶和山是故鄉。

紀夢

三百年來定裏身。今朝忽到禮真人。擎天一具黃

金骨。鐵樹花開萬劫春。

福嚴開山鐵文禪師

一、緒言

福嚴寺の開祖鐵文禪師は黃檗宗の本山第二代惠明國師木菴禪師の法弟で一切經翻刻で名高い鐵眼等と同じく黃檗十鐵の一人である。其生地の柳川侯立花鑑虎公の懇請で福嚴寺の開祖となり、領内各地に大法幢を立て、新興宗派の宣揚に精進し、其徳風は遠く禹域に傳はり、遙に海を渡つて教を請ふものや、偈文を寄せて歸敬するものも尠からず、鎮西に於ける黃檗の重鎮として景仰せられた。殊に新刻の語録を後水尾法皇に上つて觀感に預り朝臣の知遇を得たことは禪師學徳の一斑が窺はれて崇敬の念更に切なるものがある。師の一生を知るには悅堂怡雲の撰んだ禪師行狀の一篇がある。でも惜いことには文簡にして詳かならざる憾がある。

二、出生と幼時

鐵文和尚は法名を道智といふ。又大癡と號し鐵文とは其字である。寛永十一年閏七月九日筑後山門郡海津村に生れた。父は西原種孝といひ鎮西八郎爲朝の後裔と稱してゐる。其母が月輪に禱り御蔭で生れた子だと言はれ、幼時から葷腥を好まず、食すれば必ず吐いた。近隣の兒童等と遊戯する時にも堂を立て、佛を禮する状をなし、郷黨から菩薩子と稱せられた。四五歳の頃には學ばないで書を読み字を寫したと傳へられてゐる。

正保元年十一歳の時、柳川臨濟宗妙心寺派の天叟寺に入り俊嶺に就て經書を學んだが師の教によらないで、自ら其意義を會得したといふ。十三歳の時出家の志を立て圓顛方服沙彌戒を受け、發願して我若し今生に大道を發明して人天の師とならずんば死に至るとも休せずと言つた。

慶安四年十八歳の時諸方を遊歴し、承應三年には京洛に入つて講經を聞き金剛般若經觀音普門品を誦した。或日讀書の際一切の聖賢は無爲の法で差別が出来たものだとあるを見て、豁然

として悟る處があつた。

三、師と隱元、木菴

師が始て隱元禪師に見え、更に心境の一進展を見るに至つたのは承應三年九月十四日からのことである。此時年僅に二十一歳であつた。

隱元は明の福州黃檗山出身で承應三年七月六日長崎興福寺の聘に應じて來朝した。師は此報を耳にし湧躍して長崎に行き興福寺に隱元を訪ねた。師は直に堂に進み

趙州狗子在_ニ那裏_ニ

畢竟本來一物無。

黃檗婆心超_ニ格外_ニ

至_テ令_レ何處_ニ著_ニ工夫_ニ

と言つた。隱元は

話頭非_レ古亦非_レ今。

看_ニ破_レ趙州_ニ絶_ニ點塵_ニ

一片婆心明似_レ鏡。

何曾_テ味_ニ却_ニ本來人_ニ

と答へて茲處に師は箇の本來の人に參して求法の道に精進することとなり、さらでだに抑へかねた燃ゆるが如き研學心は非凡の大知識に接してますます熾烈となつた。

明暦元年秋の頃隱元は攝津普門寺の請によつて上阪した。師は此時隱元に陪して其側にゐたが、舊師俊嶺の病篤いと聞き倉皇行李を整へて郷里柳川に歸つた。かくして病床に侍して湯藥を勧め懇ろに看護すること三年、孝養到らざるなく衷情人を動かすものがあつた。俊嶺入寂の後再び長崎に出て福濟寺に行き、木菴禪師を訪ね一見して其大徳たるを看破し欽仰の念愈篤く一味參禪して親く其教を受けた。木菴は

我此方に來つて多歳を經、いまだ一氣色の者を見ず、今汝後生心を虚にし體窮せば我濟宗寂寥ならず囑々

と師を激勵したと傳へらる。師か舊師の疾を聞き、三年の間、向上の志を抑へて恩師の病床に侍したことは稀に見る師道の美譚として嘆賞すべきものであらう。

萬治二年の秋、禪林寺の石峰寂し師其後住に推舉せられた。時に年二十六。師は若齡にて攻學の志固く疾と稱して辭退したけれど左右の強請によつて遂に其囑に應じた。其時の述懐に

且住禪林遺病身

蒲團紙帳自相親

頭陀不識人間事

只麼隨緣過幾春

と言ふのがある。暫時にして高木山に隱遁して煙霞の間に自適悠遊した。

寛文二年隱元大和田に地を賜ひ新に黄檗を開くと聞き、師は再び上洛し、其翌寛文三年十二月朔日祖師の戒壇に參して具足戒を受けた。時に年三十歳。

寛文四年隱元退隱し木菴第二代の法嗣となつた。師は其左右に侍して専ら寺務を執掌し少しの滯滞もなく衆人嘆服して法門の柱礎と稱したといふ。師は木菴の股肱の法弟として禪學の進歩著しく此間の消息は怡雲の撰んだ師の行狀に明記されるも、一般には難解のものと思はれるので悉く省略することにした。

寛文五年青葉隠れに時鳥鳴きしきる五月初、長崎福濟寺の蘊謙が黄檗に來た時には、師は東道して宇治に遊んだ。此時應酬の詩か残つてゐるが、之を見ると如何に其清遊の俳か偈はれてゆかしい思がする。

寛文六年六月二十九日後水尾法皇佛舍利寶塔を隱元に賜はつた。師、偈を上つて之を賀した

寛文九年師が柳川に還るまで黄檗にあつて法務に従事すること七年。其令名は儕輩を歴して山の内外に響き渡つた。

四、藩主の招聘

寛文九年三月師三十六歳の時、師は木菴に陪して江戸に行き海福寺に寓した。此時郷里の柳川侯鑑虎公上府中であつたが、師を招いて郷國柳川の梅岳山福嚴寺の開山の祖として歸郷せんことを懇請された。鑑虎公は柳川藩三代の侯て其頃鑑茂公と稱せられ、後、英山と號し二代忠茂公の令嗣である。公は寛文四年閏五月父忠茂公の跡を嗣いて家督せられ師を召された時は御年二十五歳であつた。素より公と師とは舊識の間であり、父忠茂公は黄檗の信仰篤く、此時は剃髮して好雪と號されてから五年目で御年五十三であつた。剃髮の時には

五十あまりみふゆの今は夢の世にいとふしるしの墨染の袖

と咏せられ爾來信仰三昧に没頭せられ、師の招聘も素より公の素志であつた。今も立花伯爵家

..(6)..

に残れる忠茂公から鑑虎公に贈られた書狀にも鐵文の下向につき妨害を試みるものがあつたら嚴罰に處せよと申送られ、または鐵文と夜の明るまで法話せよなどと勧められたことが記るされてゐる。

師は鑑虎公の懇請に對し德薄く學足らずと稱し辭退したので公は特に木菴に其説得を乞はれた。木菴は師に

祖道興隆の時縁が來た。今汝大任を荷擔す。法門頼あり、佛祖莫報の恩を酬ゆるに堪へよう。と言つて歸國を慫慂したので、師は謹て師命に従ひ聘に應ずることゝなつた。此時師は次の一詩偈をもした。

..(7)..

入_レ山_ニ請_フ法_ヲ接_シ高_流。雲水陪從過渡頭。

岩桂花開秋景麗。香風吹送木蘭舟。

そこで黄檗に歸り隱元老和尚に謁し別辭を述べたか隱元は喜んで一偈を與へた。それには萬行力持眞潔漢。通身鐵鑄是男兒の語があつた。新興宗派の弘通と祖風の播揚を使命として郷國に於ける傳道の第一線に邁進しようとする新知識を送り出すには洵にふさわしい嘯と言へよ

う。木菴を始め黄檗諸師の送別の賀章篋に滿つた。

かくて八月五日黄檗を辭し海路平安八月二十四日柳川に着いた。領民路を擁して鯨を迎へ鑑虎公自ら寺に臨て晋山の式を行はれ師また入山の偈を作つた。

寺は柳川城内宮永小路にあつた。今では城内村奥州町に屬してゐる。寺は天正の頃宗茂公當城入部の始め父道雪公の爲に立てられたもので、もと梅岳寺と稱し曹洞宗永平寺の末寺であつた。開祖は筑前醫王寺の緒菴である。關ヶ原役後田中吉政就封の時之を毀つて家士の宅地とした。元和七年宗茂公再城後再興せられたが五代碧雲僧道を失つて退隱し少時空寺となつたので此度師を迎へ中興の開山とし曹洞宗を改めて臨濟宗黄檗派とし寺名を改めて梅岳山福嚴寺といひ立花家の祖道雪公（鑑連公）を福嚴寺殿と稱し歴代菩提の道場とし下柵町で寺領百石と現米七十石を賜り供料に充てられた。時方に寛文九年九月であつた。

福嚴の寺號に就ては興味ある一挿話がある。此春師か木菴に従て江戸に留錫してゐた頃某居士費隱禪師筆蹟の一幅を携へて師に贈つたことがある。師悦んで之を披くと待月來の三大字で墨痕淋漓宛ら雲煙飛動の趣があつた。其翌日鑑虎公から福嚴寺の開祖として懇請せられた。其

秋歸國の途次舟中にて仲秋に遭ひ明月皎々として金波搖き興趣言ふべからず、費隱の待月來の一幅が既に此行あるを豫識したかの感があつた。師は一詩偈を作つて、『此時翻憶祖翁語。恰值仲秋待月來。』と歌つてゐる。思ふに唐山の福嚴は費隱開法の道場であつて、師が寺號を福嚴と選んだのも偶然ではない。費隱は黄檗の高僧で隱元の師である。今も待月來の一軸は寺寶として珍藏されてゐる。

寛文十年二月師は木菴の還曆を賀せんとて柳川を發して黄檗山に入り、次のやうな問答を試みた。

木菴 如何なるか是れ梅岳の境

鐵文 梅岳花開いて福果を嚴にし柳川水碧にして恩波を漲らす。

木菴 如何なるか是れ境中の人。

鐵文 胸次元、字脚を留めず、饑來つては飯を喫し困し來つては眠らん。

木菴 只生佛未生已前の如きは還つて人境ありや。

鐵文 空劫已前界至なし、鐵樹花は開く大地の春

木菴 汝既に斯の如く我亦斯の如し。

木菴は此問答を法堂に掲げて衆に示したといふ。

延寶元年師四十歳の時突如郵書を齎らして隱元の不例を報した。師は急遽行装を整へ即日出發したが老師は既に入寂し遂に其溫容に接することを得なかつた。計を途上の舟中に聞き蹉跎して悲嘆の涙にくれたといふ。

かくて四月十六日舟を捨て、陸路黄檗に上り木菴を訪ねて又禪の問答をなし學徳愈加つた。

延寶二年大雄寶殿、選佛場、禪悅堂、方丈、寢室、浴室、衆寮等落成し輪奐の結構整然としてさすがに鎮西屈指の名伽藍となつた。また佛菩薩、大弟子、護法神王、祖師聖像を安置し法器悉く備つたので、十月初日忠茂鑑虎二公の意を承け開法の式を行つた。まつ寶祚の無窮を禱り檀越の加護を奉謝し、更に師翁のために法恩に酬みんとて祝國開堂の句を誦し、臨濟三十四世の法燈を繼いで宗風の振興を誓つた。人皆歡呼して優曇の現れだと喜んだ。使を黄檗に遣はして開堂法語を呈した。木菴一覽の後衆に示して、文長老西河に出世して大に獅子吼をなし衆を驚かした。之を世の法式とせよと言つたといふ。文長老は鐵文のことで西河は柳川のことたる

は言ふ迄もない。

此福嚴開法を祝した木菴を始め南源、鐵眼、超宗等の詩偈妙からず、いづれも師の此道に於ける偉大な歩みを嘆賞して餘す處がない。

延寶三年黄檗山内に塔頭別峰院か建てられた。之は忠茂公の力によつたものである。忠茂公は延寶三年九月十九日江戸下谷邸で六十四歳で逝去され墓は小石川徳雲寺にあつたが近年福嚴寺に改葬された。別峰院殿忠嚴好雪大居士といふ。師は進塔の法語や遺影の讚、大祥忌の法語等で多年護法の恩を稱へて哀惜追悼の洵を致してゐる。之等は悉く鐵文禪師語録中に收められてゐる。

今福嚴寺に師に與へられた好雪公の書狀を藏してゐる。

幸便一筆令啓上候。先日就床候へども態御返事不申、上方無別條、兩和尚彌堅固候哉承度候。和尚御參内未不被成候哉、先度如申述候。御參内迄は尤在京不及申、左近も定而可爲同意と存候事に候。紫衣御禮御使僧被差下候由に候間委細可承と存候ゆへ爰元へ御下向之沙汰無之故不承候。御老中迄之仰達之趣如何様相定御返事可承候恐々謹言

六月廿八日

好雪花押

猶々七月に以之外痛其上左之腕筋事外痛、手も足も不_レ相稱_二起居やすからず、ことに狀書候事指動不_レ申候故何ともこゝろまかせず諸事申殘候。長泉院事定たる事候間、歎不_レ申様にと和尙之仰も有難奉_レ存候。存命被_レ申候事いつまでも限なく存候へども身まがり申候ては塵界被_レ出西歸安樂の佛身と成し申候間、少しもなげき不_レ申候然し點石一佛。

點石一佛の結語など公の禪に對する素養の程が窺はれて宗門の尊敬を得られたことも尤だと思ふ。長泉院とは宗茂公の後室である。

五、語録の獻納

悅堂怡雲の撰んだ鐵文禪師行狀に

乙卯の夏飛鳥井亞相公梅小路定矩公新刻語録を以て太上法皇に奏進す、陛下御覽あつて歡感讚嘆し給ふ。

と見えてゐる。之は延寶三年の夏飛鳥井雅章が梅小路定矩によつて語録を後水尾法皇に獻したことを言つたものである。師の詩偈に

贈_二飛鳥井雅章亞相公_一

芳聲傳_レ耳久。

今日接_二台光_一。

受_レ囑憶_二靈鷲_一。

竭_レ誠侍_二聖皇_一。

全身渾_二道義_一。

滿吐盡_二文章_一。

抄_二入菩提路_一。

家門倍_二永昌_一。

とあるが之は其悅を賦したものだ。亞相とは大納言の唐名である。西原一甫の蒐集した郷土資料の斷篇の中に長久寺藏として

法皇の御所に語録を奉る序によみ侍りける

福巖鐵文道智上

鷲の山とほき御法を洞の中にふみ傳へぬる道ぞかしこき
といふ歌がある。如何に怡悅の情が此一首の裡に躍如たるかが窺はれて人知れず微笑を禁じ得ない。之に關した梅小路定矩の飛鳥井雅章に宛てた閏四月十九日付の書狀が今も福巖寺の什物として傳へられてゐる。

今朝は被_レ托_ニ高駕_一畏存候。鐵文語錄一冊備_ニ觀覽_一候處御機嫌之御事候。且又園中草花並修學學院御見物之御禮之義委細令_ニ披露_一候。彼是相こゝろ得可_ニ申達_一之旨御氣色候。猶以_ニ貴顔_一可_ニ申承_一候恐々謹言。

後四月十九日

定 矩

飛鳥井亞相公

之は師の光榮を物語る唯一の史料といふべきものであらう。

此語録は後年上梓して鐵文禪師全錄に收められ木菴は此書に跋して

老僧、文公長老の開法語録を閱過するに珠、盤中に走て人の心目をして清涼ならしむ。

と稱讚してゐる。

また延寶三年の秋には清朝の翰林院侍講張玉書は師の道風を聞き印章三顆を贈つて歸敬の洵を表した。それには臨濟正宗、開宗福巖、鐵文道智と刻されたものである。語録は遙に海を渡つて清國に齎され、延寶七年には張玉書及禮部侍郎陳廷敬、天和元年には三平寺六牙和尚各序文を撰んで贈つてゐる。貞享三年清人元濤季は師の道風に憧憬して商船に搭乘し長崎に來航し

た。之れもと漳州の人で三平寺六牙に參し竊に師に私淑したものである。然し國禁の爲に親しく會見するを得ず、僅に書を贈つて眷々の情を寄せた。師は

聞君參叩_六牙翁。 又訪_テ大癡_ニ到_ル日東_一。

鼻孔由來無_ニ兩竅_一。 須_レ知千里一同風。

といふ偈を贈り其好意を謝した。濤季は此贈物を無上に感謝しつゝ師の像を描かせて歸國したといふ。

鐵文禪師全錄は師の歿後四年元祿五年に法弟等の手によつて完成され、語録に加ふるに小參、機緣、法語、詩偈、銘文等を以てし十二卷よりなつてゐる。然も此書の卷首に畫像の自題がある。

這漢の面目佛祖も識らず。相を離れ名を離れ藏なく覆なく誰か虚空を判せん。謾に紙墨に著はず。原來無位の真人、畢竟聲色に墮せず。

如何にも禪味饒かなものではないか。

六、法雲寺と十八羅漢

忠茂鑑虎兩公の熱烈な信仰心は其夫人等を動かして貞照、貞壽、貞圓の夫人などには師の示した法語などもあつて夫等は全録の中に收められてゐる。

貞照夫人は忠茂公の奥方で伊達政宗の嗣子忠宗の女で光宗、綱宗、宗良等の同胞である。法雲院といひ俗に仙臺奥様と申す方である。入興は正保元年であつて其行事が如何に盛大であつたかは今も傳説として小田部土佐の伊達家に對する豪放な瘦我慢の逸話などが残つてゐるので推察されよう。子守歌に

赤馬十匹、黒馬十匹、白馬十匹、三十匹の馬を何處に繋いで置いたる、三本松の木の下、何喰はせて置いたる、去年の稗穀、今年の粟穀、十把ばかり喰はせた、

といふのが残つてゐるが、之も當時の片影を物語る俚語である。

夫人の信仰に就いては鐵文語録の中に次のやうに見えてゐる。

法雲院大夫前年山僧に請うて菩薩戒を授かる。嗣後世相を輕視し常に佛事を以て業となす

蓋大夫福足り慧足り女流中にありては眞の丈夫人なり。一日道を聽く、曰く凡夫の法を具足して凡夫知らず、凡夫若し知らば聖人なり。聖人の法を具足して聖人會せず。聖人若し會さば則凡夫なりと怡然として領解す。

此一事によつても夫人が女流として佛道に悟入せられた先覺者であつたことが窺はれよう。師は夫人を讚美して「頓に解脱の知見を開く、水を出づるの蓮華といふべし」など言つてゐる。

夫人は延寶八年二月二日易簀せられた。忠茂公の歿後五年であつた。

鑑虎公は同年母公法雲院のために三池郡倉永村にある曹洞宗崇勝寺を改めて黃檗宗として龍首山法雲寺と改められ、師を其開山に仰ぎ倉永村にて寺領五十石を寄進せられた。師時に年四十七。

越えて六年貞享三年の秋には師は唐匠遊君亨に命じて十八阿羅漢の像を彫らせ龍首山法雲寺に安置した。像の高さ五尺、梵容生動殆んど語らんとするものゝやうである。降龍、伏虎、弄獅、看經、捧塔等種々の諸相を現はせるもので其開光の文は師の全録の中に載せられてゐる。今も龍首山法雲寺に杖を曳くものは金色燦爛たる十八羅漢の偉容に瞠若たるものがあらう。

七、晩年と往生

師が藩侯の聘に應じ新興黄檗派の爲に弘法の宣傳に精進することゝなつてから、曹洞派の鑑山寺は瑞雲山聖壽寺と改め寛文九年に黄檗とし師其開山となり福嚴寺の宿院となつた。三池郡楠田村の曹洞宗なる梵天山帝釋寺、山門郡高木の妙心寺派高木山海福寺も同時に師を開祖として黄檗に歸した。

延寶八年には師は立花雪關の請により三池郡上内法輪寺の開山となつた。

貞享二年一月二十日木菴示寂。二十九日其訃音に接した。二月一日香を焚き文を奠して泣血百拜して其靈を祭り、師恩難報丘山重、我思欲言海水長と嘆してゐる。全錄に黄檗本師老和尚を祭るの文三篇を収めてゐるが悲痛哀悼の情紙上に溢れてゐる。次て上洛して紫雲院を訪ひ先師手栽の海棠が雨に惱めるに懷舊の思とゞめがたく一詩に托して綿々の情を寄せてゐる。

此秋七月俄に風痺(れび)を患つたが、八月晦日の福嚴寺殿梅岳道雪居士の百年の遠忌には疾を力めて上堂した。冬になつて病や、快癒を得たが退隱の念深く、貞享四年には龍首山に退居し

て法喜菴を作つて佚老の計をなした。此年崇勝寺(舊名弘濟寺)圓鏡寺(舊名延慶寺)等黄檗に入り福嚴寺の子院となり、師を開山に勸請した。十月十一日鑑虎公は師に福嚴寺の再住を請はれたけれど病の爲に辭退した。懇請再四の後遂に已むを得ず一期を約して命に應じ十九日入寺した。元祿元年師は法席を玄堂に譲つて龍首山に入つた。七月九日は恰も師の誕辰である。其前日梅岳龍首關係の僧俗、師の爲に祝壽の議を開いた時、師は「山僧の在世久しくはない。祝壽など何の益があらう」と笑つてゐたが、此言遂に讖となつた。

それより三日を経て疾にかゝり八月二十五日遺囑及寺規數則を作つた。九月初日には小康を得、衆皆悦んだが師は木末の殘陽鳥ぞ能く久しからんやと言つたといふ。

十日自ら乗炬(いせ)の法語を書いて玄堂に唱へしめ、十三日には髪を洗ひ身を清め衣を更て跏趺し諸弟子を召して

我が行期明日にあり、我歿後汝等麻を著け白を戴いて以て佛制に違ふを致すこと勿れ、唯精進努力見性を以て急となすべくんば庶幾(こつがは)くは可ならんか。

と言つた。左右駭然として驚哭し師の長生を願つた。師は叱して

汝等出家兒蓋そ各々生老病死當然の理に委せざる

といひ鑑虎公に書を上つて多年護法の恩を謝したが、十三日に至り湯を需めて面を洗ひ、左右を顧みて死期の近きを示した。衆遺偈を請ふ。師、怡雲に扶け起され辭世を書いた。

生不生、滅不滅、空合空、別無別、畢竟如何

喝一喝、遂に筆を措いて端座し少時あつて泊然として逝いた。時に元祿元年九月十三日の正午であつた。享年五十五。

十五日遺骸を茶毘に付し遺骨舍利を分つて塔を福嚴寺、法雲寺、別峰院、崇勝寺、圓鏡寺、法輪寺の六處に立てた。

今や師の入寂後二百五十年、其開山の梅岳山福嚴寺にては遠忌の大法要行はれ遠近の老若男女來り詣で、師の遺徳を偲ぼうとしてゐる。山門を仰げば隠元の筆になる梅岳山の扁額が往年の俤を留めて名利の昔を物語つてゐる。本堂に掲げられた額、さては聯などいづれも木菴の筆蹟を刻したもので、そのかみ法筵のいみじかりしことなど、そゞろに偲び出でらるゝ。開山堂の師の木像を拜しては鶏群の一鶴の如き師の風貌が躍如として神に迫り覺えず端然として襟を正さしむるものがある。師の流風餘韻は今も禪林に久遠の法音を留めて永劫に涉つて亡びない無限の教訓を残してゐる。

鐵文禪師略年譜

年號	歲	
寬永一	一	閏七月九日山門郡海津村に生る
正保元	一一	柳川天叟寺に入り俊嶺に學ぶ
	一三	剃髮沙彌戒を受く
承應三	一一	九月十四日長崎興福寺に趣き隠元を訪ふ
萬治二	二六	禪林寺の石峰寂し其後住となる
寬文二	二九	隠元、黃檗を開くとき上洛す
	三〇	十二月朔日隠元の戒壇に參し具足戒を受く、即非小倉に來り廣壽山福聚寺を開く
	三一	隠元引退し木菴法嗣となり木菴に師事す
	三三	後水尾法皇佛舍利寶塔を隠元に賜ふ、偈を作つて之を賀す

元祿元	四	三	貞享二	八	三	延寶元	一〇	九
五五	五四	五三	五二	四七	四二	四〇	三七	三六
法席を玄堂に讓る、九月十三日午寂す。年五十五。	龍首山に退隱、法喜菴を作る。崇勝寺、圓鏡寺黃檗に轉ず。	此秋唐匠遊君亨の十八羅漢を法雲寺に安置す。清人元濤季商船に乗じて師を訪ひしも國禁の爲に相見するを得ず、師偈を贈つて好意を謝す。	一月二十日木菴寂す。七月風痺にかゝる。八月晦日道雪公百年遠忌を營む。	二月二日法雲院逝去。法雲寺、法輪寺創立。	三月黃檗山内に別峰院を立つ。四月新刻の語録を後水尾法皇に献す。此秋清國張玉書印顆を贈る。九月十九日忠茂公逝去。	十月朔日福嚴寺の諸堂落成、開堂式を行ふ。	四月三日隱元寂す。直に行李を整へて黃檗に赴く。	二月木菴還曆に當る、柳川を發して上洛賀詞を述ぶ。
三月木菴に從て江戸に赴く。鑑虎公より福嚴寺の開祖たらんことを請はる。八月二十四日柳川に歸り九月福嚴寺の開祖となる。帝釋寺、海福寺創立。								

昭和十一年四月十日印刷
昭和十一年四月十七日發行

(非賣品)

著者 福岡縣山門郡城内村字奥州町 福嚴寺
發行者 福岡縣山門郡柳河町字椿原町 茂政
代表者 岡 政
印刷者 福岡縣久留米市鍛冶屋町二三 山次郎
印刷所 福岡縣久留米市鍛冶屋町二三 秋松活版所

終

